

1 皇帝と騎士

黒の騎士団を懐柔、手駒にし悪逆皇帝から世界を救うという名目で支配を目論むシュナイゼルからフレイヤを奪うことに成功したルルーシュ。そしてシュナイゼルはギアスをかけられ、ゼロに遣わせる人形となった。

世界征服―僕たちの計画である壮大な第一歩を踏み出し、世界を手に入れたルルーシュは優しい顔をする事が多くなつた。

心なしかC・Cも君への態度が優しくなつた気がする。
(まあC・Cが優しくなるのはなんとなくわかるとして)

君はどうしてそんなに笑っているの？

僕という時までそんな風に笑わないで欲しい。

そんな君を見てみると僕の心が弱くなるから。

一年前から決めていたのに、覚悟していたのに、君を見ていると忘れそうになるんだよ。

僕が君を殺すということ。

「スザクご苦労だったな。夕食が出来ているが食べるか？」

―また、笑顔だ。

既に死んだことになったはずのスザクは、普段は偽名を使い変装をしてルルーシュに言われたことをこなす。とはいっても元々体力自慢のスザクではやれることが限られてはいるのだが。

「今食べないのなら、置いておくが」

返事をせずただ立っているスザクに声がかかる。

ふと視線を移せばC・Cは既にルルーシュが作ったであろう料理に、あまり優雅とは言いがたい作法で食べ始めている。

最近彼女は（それしか食べないのではないかと思えるほど食べていた）ピザ以外―というかルルーシュの作った食事―もよく口にするようにしていた。その様子を見る度にルルーシュがもうすぐいなくなると実感させられるようで、胸がざわつく。

「いや、食べるよ」

スザクはルルーシュの顔をもう一度確認すると、ため

*
*

息を吐いて返事をする。

「そうか、じゃあ少し待っていてくれ」

そう言つてルルーシュは僕に背を向けると奥へ歩いていく。

この皇帝の私室には特別に簡易的な厨房がついていて、料理が得意だったルルーシュはたまに自分で作る。専用のコックがいるにも関わらず家庭的なことをする彼は、皇帝というよりもただの学生に戻つたようだ。

「書類上死んだ身だというのに忙しいことだな」
「食べる手は止めずに、C・C.が声をかけてきた。」

「別に、僕はそんなに働いてないよ。できることも少ないし」

謙遜ではなく本心から応える。今日してきたことと言えば、犯行勢力の鎮静にギアスのかかった兵に紛れて行つただけだ。それも身を隠しているために何十分の一ほどしか力を使っていないから、体を動かした気もしないのだった。

「ふん。良かったじゃないか、できることがあつて」

「…」

いつもながらにC・C.の言葉は真意を図りかねる。そのままの意味なのか、自分は何もできないという嫉妬からなのか。おそらくは『何の意味も持たない』が正解ではないかとスザクは思っている。

「君はずっとご飯を食べていたのか?」

「そんなわけないだろう。寝ることもしたし、ルルーシュをからかったりもした」

C・C.の存在はずっと不思議なままだ。ルルーシュにギアスを与えた人。ルルーシュがゼロとして戦っているとき、あるいはただのルルーシュとしてのときも傍にいた人。彼女は今どんな気持ちでルルーシュの傍にいろのだろうか。

「つまり何もしていないんだね」

特に感情も込めずに呟くと、C・C.からも熱の籠らない返事が返ってきた。

「私は元々役割などないに等しい。何もすることがないのは正解なんだ」

正解、とは—どの問題についての答えだろう。

C・C.との会話は常に難解で、理解が難しい。ルルーシュはこんな会話を毎日続けていたのだと思うと、彼の苦勞が窺える。あるいは彼の頭脳ならスムーズにC・C.と向き合うことができるのか。

僕とC・C.がそんな会話をしているとトレーに二つ皿をのせたルルーシュが戻ってきた。

「今日はシンブルにオムライスだ」

テーブルの上に乗せられていくそれに視線を動かすと確かに黄色と赤のコントラストが見えた。ほどよく熟した

卵と素材の焼けた香りでも食欲をそそられる。サイドにはサラダやスープもあり理想的な食事と言えた。

テーブルに食器を並べられていくのを見るとあることに気付く。二人分あるのだ。

「ルルーシユも今食べるの？」

「そのつもりだが」

自分の向かい側に腰を下ろすルルーシユに尋ねて返ってきた答えに、「そう」となんでもないように返事をするが内心は動揺していた。ここ最近ルルーシユが傍にいることに緊張するからだ。

「…俺がいたら食べづらいか？」

そんな様子に気付いているのか否か、掛けられた言葉になるべく何も無いように否定する。

「別に。君も早く食べれば？」

「ああ」

その先に一切の会話もせず食事を進める。

本当は何か話をするべきなのかもしれない。伝えるべきことがあるのかもしれない。

けれど口を開けば聞いてしまいそうな自分が嫌だった。

『もう二人の間で嘘は吐かない』

ゼロレクイエム成功までのルールではあったけれど、気持ちを黙っていてはいけないということ言われていない。だから僕は心に秘めていた。

なぜ君は笑っていられるの？僕が憎かったはずだ。殺そうと思ったはずだ。そんな奴に自分を殺せと言う君は…ルルーシユは、それでいいのか？

僕は俯いたまま夢中で食事をした。ルルーシユの顔を見るとどうしたらいいのかわからなくなる。

そんな僕を見ていた視線は彼からなのか彼女からののか、気付かないふりを続けた。

「ルルーシユっ！？」

その日も大したことない雑務を終え報告のために皇帝の執務室に行くと、部屋の主が倒れていた。何事かと思ったが、呼吸を確認するとひとまず安堵する。そして同時に周囲の状況で経緯を理解した。公務の最中に手放したのだろう、椅子から滑り落ちたようにルルーシユは床へ転がっていたのだ。周りには積み上げられていただろう書類が散乱している。これだけ根を詰めて処理しているのだから倒れるのも当たり前に思えた。